12. 新しい学力観と新しい映像活用能力

芝　崎　順　司

1．新しい学力観の特徴

新しい学力観は、よくいわれているところであるが、これまでにはなかった全く新しい学力観を意味するのではなく、現学習指導要領が目指す学力観として登場したものである（文部省. 1994）。

文部省の指導要録の解説等によれば、新しい学力観とは自ら学ぶ意欲や思考力、判断力、表現力などの能力を学力の基本とする考え方である。つまり、関心・意欲・態度といった情意的な側面の学力の重視と思考・判断といった学習の過程に働く認知的な側面の学力の重視、及び従来からの知識・理解といった学習者にとって受信型の学力に加え、表現力という発信型の学力の重視が新しい学力観の特徴といえよう。

2．新しい学力観と情報活用能力

こうした新しい学力を形成する重要な要素として、情報活用能力があげられ、その育成が現学習指導要領の大きな眼目の一つとされている。

ここでいわれている情報活用能力は次の４つの内容に整理される。

①情報の判断、選択、整理、処理能力および新たな情報の創造、伝達能力

②情報化の特質、情報化の社会や人間に対する影響の理解

③情報の重要性の認識、情報に対する責任感

④情報科学の基礎および情報手段（とくにコンピュータ）の特徴の理解、操作能力等の習得

このように情報活用能力は情報化社会の特質理解も、情報に対する責任感や倫理も、情報処理能力も、そしてコンピュータの操作やプログラミングなども合わせ含めた多義的な概念としてとらえられているが、特に①で示されている能力は思考力、判断力、表現力と密接にかかわりあう能力である。

思考や判断は人間の内的な情報の操作活動がその中心であり、表現はそれを外的にあらわすことであるといえるので、情報活用能力は思考、判断、表現に不可欠な能力である。

このことが情報活用能力の育成が現学習指導要領の大きな柱立ての１つとされた理由の１つであろう。

3．情報活用能力の再検討と新しい映像活用能力

情報活用能力には、コンピュータ・リテラシー、メディア・リテラシー、ビジュアル（画像）・リテラシー、映像活用能力、カルチュラル・リテラシー、情報リテラシー、情報処理能力など類義語が多い。

これらの用語のさす意味内容はあいまいで流動的な部分を含んでいる。それはメディアや情

報という概念のとらえかたが人によって異なることや新しいメディアの出現によってその新しいメディアを活用する能力をどう取り扱うか－既存の用語の概念の中に取り込むことができるのか、それとも全く新しい概念として新しい用語をつくる必要があるのか、もっと根本的にはそのメディアを活用する能力を取り扱う必要があるのか、その能力を獲得した結果、人間はどう変わるのか－という問題が常に起こっているからである。

また例えばメディア・リテラシーの頭に‘広義の’とか‘狭義の’という言葉をつけ、使い分けることもされているのでますますその差がわかりにくくなっている。

しかし、一般的には映像活用能力とビジュアル（画像）・リテラシーはほぼ同義にとらえられる。かつてはメディア・リテラシーもほぼ同じ意味で使われていたが、新しいメディアであるコンピュータの出現と普及により、メディア・リテラシーは映像活用能力（ビジュアル（画像）・リテラシー）より、より広い概念を含んだ用語となった。

一方、情報化社会に対応するための能力としてクローズアップされたのが情報活用能力であり、情報リテラシーである。さらにその一部として情報の判断、選択、整理、処理にかかわる能力として情報処理能力がある。前述のようにこの情報活用能力の育成は現学習指導要領の大きな柱立ての１つとされているが、ここで問題となってくるのは一般的に学校現場では情報活用能力をほとんどコンピュータ・リテラシーと同義にとらえていることである。

確かに社会におけるコンピュータの急激な発展と普及から取り残された1980年代から受け継がれた課題として、学校教育の中でコンピュータ活用能力が重視されたのは当然のことと考えられる。そのことが情報活用能力の育成が現学習指導要領で強調されたもう１つの理由であろう。

しかし、特に1990年代にはいってから、コンピュータを教具として活用するだけでなく、それを媒介とした新しいコミュニケーションのメディアがマルチメディアとして登場し、注目されている。そこでは情報としてビデオ、スチル、アニメーションなどの映像や音声、文字など人間がつくりだした多様なシンボル体系を一体的に取り扱うことができる。また情報を受信するだけでなく、情報の編集や加工、検索ができ、さらにネットワークにより多様で豊富な情報の相互交流が現実のものとなりつつある。そうしたマルチメディアを活用する能力ということでマルチメディアリテラシーという用語も登場している（田中、1994）が、そのような視点にたって情報活用能力を再検討することが必要である。

この情報活用能力の再検討にあたって考慮すべきことは、情報という言葉のもつ意味内容である。繰り返しになるが、従来、学校教育の中では、情報はコンピュータによる情報として扱われる傾向が強かった。しかしこのコンピュータによる情報自体が現在では映像を含めた多様なシンボルにより構成されるようになってきている。

水越敏行（1994）は前述の４つの情報活用能力の内容が10年近く前に出された提案に基づいていることを踏まえ、今日の情報活用能力の内容について次のように提案している。

（Ａ）情報の判断・選択・整理・処理能力

（Ｂ）基本的な応用ソフト・教育用ソフトの利用能力、情報や映像機器の操作能力

（Ｃ）状況に適したメディアや機材の選択能力

（Ｄ）情報の創造・表現・伝達能力

水越がここでいう情報はコンピュータによる情報のみを意味するのではなく、マルチメディアを含めた様々なメディアによる情報を意味している。

この内容にも表れているが、これからの情報活用能力を考える場合にはこれまでのコンピュータ活用能力と映像活用能力を融合させて考える必要があると思われる。

さらにコンピュータのハードの操作が簡便となり、その操作能力の比重が相対的に低下し、逆にソフト面での映像情報の比重が大きくなる傾向が進めば、情報活用能力の中心は映像活用能力になると考えてよいのではないだろうか。

日本では映像活用能力の育成が学校教育の中で日常化されることなく、コンピュータの導入により情報活用能力がコンピュータ活用能力として強調されてきたが、マルチメディアの出現、普及により、情報活用能力の重要な要素として映像活用能力を再評価する必要が生じてきたと思われる。

とはいえ、そこでの映像活用能力は従来その中心として考えられてきたテレビに対する映像視聴能力という狭い枠組のみで考えられるものではない。水越のいう（C）や（D）の能力、さらには情報のネットワーク化にも対応できる能力を含めた能力としてとらえなければならない。

そのためにも映像活用能力の再検討を試み、新しい映像活用能力のあり方を考えたい。

4．新しい映像活用能力について

映像活用能力は一般的に以下の３つの下位能力から構成されるとされている。

１つは情報の受け手としての映像活用能力で、映像視聴能力といわれているものである。

２つ目は情報の送り手としての映像活用能力で、映像制作能力といわれているものである。

３つ目は情報の使い手としての映像活用能力で、映像利用能力といわれているものである。

(1) 映像視聴能力ー「創造型の読み」の重視

従来の映像活用能力の研究や育成のための研究及び実践はテレビを代表とする映像に対する視聴能力をその中心的課題として進められてきた。

筆者は以前、先行研究の分析の結果、映像視聴能力は映像情報を読む能力としてとらえることができ、映像情報を読む過程には「伝達型の読み」と「創造型の読み」の過程が含まれていることを明らかにした上で、中等教育段階の生徒を対象とした映像視聴能力育成のための教育の目標を「伝達型の読みをふまえ、創造型の読みを深めること」に設定すべきであると提案したことがある（芝崎. 1989）。

「伝達型の読み」とは記号の意味化であり、送り手（制作者）側の意図の読み取りに重点が置かれ、内容を正確に理解することが読みの目的とされる。この過程の読みをささえるのは映像をある一定の方略に基づいて、例えば、映像の特性ー時間・空間の調整等ーや暗黙の了解事項としての映像制作の手法ークローズアップ表現やモンタージュ技法等ーをふまえて解読することである。しかし、映像制作の手法は常に新しいものが加えられたり、改められたりする。また映像制作の手法に精通しなければ映像視聴ができないわけではない。確かに映像制作の手法に通じていることは送り手の意図を読みとる上で有利に働くと思われるが、一方コードによ

る意味の限定がゆるいのが映像の特性であると考えられるので、厳密な「伝達型の読み」にこだわる必要はないと思われる。

映像情報を読む過程にはこうした送り手とのかかわりにおける読みだけでなく、受け手に固有の読みも含まれる。つまり「伝達型の読み」をふまえた上で、受け手固有の主体的な解釈を生成していく過程も読みの過程なのである。受け手固有の主体的な解釈の生成は主体的な興味、関心、問題意識と結び付いて、今までなかった新しい意味（世界）を受け手が発見する創造的活動である。受け手は自らの先行経験や知識、これまでの映像体験と結び付けたり、対比することにより、受け手の主体的な解釈を生成していくのである。また、その読みの過程には文章の行間を読むのと同じように、映像に表現されていない意味を読むことや、映像が展開されるであろう先を読むことも包含されるが、そのような活動は受け手の洞察力や創造力にささえられる。内容の理解をめざす「伝達型の読み」に対して、受け手の主体的な解釈をめざす読みは「創造型の読み」といえよう。

そしてこの「創造型の読み」と「伝達型の読み」をつなげる接点となるのが、「なぜ、どうして」という疑問の喚起である。疑問をもつとは、意味付与作用によって安定している世界観が安定性、自明性を失うことを意味する。自明性、安定性の崩壊によって不安定になった部分をうめて、再び安定した世界像をつくろうとする精神の働きが思考である。思考によって疑問が解消された場合には、新しい意味付与がなされ、再び安定した世界像がつくられる。この新しく生成される意味付与が解釈なのである。

読み手が「伝達型の読み」を志向しても意味を限定することができず、「伝達型の読み」の過程で疑問が生じることもあるし、また、「伝達型の読み」の結果、ある意味を読み取ったとしても、それがこれまで自分がもっていた世界観と異なることにより疑問が生じることもある。このような「伝達型の読み」の過程で生じた疑問や結果で生じた疑問が、受け手を「伝達型の読み」にとどめておかず、疑問の解消をめざす思考の働きによって解釈を生成させようとする「創造型の読み」を志向させるのである。

「創造型の読み」ではまず自分なりの疑問をもつことが出発点となり、その上で、思考を働かせて自分なりの解釈を生成する過程が重要である。自分なりの解釈というのは右を左と読むことではないが、どのように解釈したかということ以上に主体的に解釈していく過程が重要であるということである。

また、主体的な解釈を生成することは重要であるが、一旦主体的な解釈が生成されれば読みの過程が終了するのではなく、今度は自らの解釈に対して疑問を提示し、吟味する活動によってさらに読みが深化される。自分自身の解釈を対象化し、それに疑問を投げかけることによって、再び思考を働かせ、さらに新しい解釈を生成させようとすることにより、結果として解釈は以前と変わらないものであるかもしれないが、その過程で読みはさらに深化されるのである。また、解釈に至る過程で働いた自分自身の思考について、対象化し、吟味すること、つまり自分には何がわかっていて、何がわかっていないのかを知ることや自分の思考の筋道を知ることも読みを深化させる。

読みの過程で生じた疑問を自分自身で解決をし、解釈へとつなげ、その解釈に対する疑問を提示し、吟味するという、つまり繰り返し自問自答することが、「伝達型の読み」から「伝達

型の読み」への橋渡しをするとともに、「創造型の読み」の深化につながるのである。

これまでの映像視聴能力では「伝達型の読み」の過程が主として強調されてきた。それは映像視聴に固有に関連する読みの過程が「伝達型の読み」に包含されていること、及び「伝達型の読み」は定量化しやすく、要素分析しやすい性質の読みであり、「創造型の読み」は定量化しにくく、評価がしにくいということがあると思われる。しかし今後は「創造型の読み」に着目すべきである。この「創造型の読み」は、新しい学力観と密接にかかわっている。つまり、学習者の主体的な興味、関心、問題意識といった情意的な側面と結びついた読みであるし、結果よりも思考という学習の過程に働く認知的な側面を重視した読みである。

このようにみていくと映像視聴能力には映像視聴に固有に関連する能力も含まれているが、それ以上に映像・言語資料を含めた、表現された意味内容をもつ様々なものを読むことに共通に関連する能力が含まれていることが明かである。つまり映像を含めた多様なシンボルにより構成されるマルチメディアによる情報を読む場合でも文章を読む場合でもその読みの方略に違いがあっても読みの過程は同じであり、また、求められる能力も一致するところが多いと考えられる。

繰り返しになるが、新しい学力観に対応する新しい映像視聴能力として、「創造型の読み」の過程が重要視される。

(2) 映像制作能力ー新しい自己表現能力として

これまで学校教育の中であまり重視されてこなかったが、新しい学力として表現力という発信型の学力の重視にともない着目されるのが映像制作能力である。つい最近まで表現活動のほとんど唯一の手段は言語によるものであった。そして現在でも言語が表現手段の中心的役割を果していることに違いはないが、カメラやビデオカメラ等の普及により誰もが表現手段として映像メディアを活用することが可能になってきた。さらにマルチメディアの出現により、ビデオ、スチル、アニメーションなどの映像や音声、文字など多様なシンボル体系を一体的に取り扱い、それらの情報を比較的簡単に編集、加工することができるようになってきている。そうした新しい環境の中で求められる自己表現能力として、映像メディアを含めた表現活動が希求されるべきである。

新しい自己表現能力とは言語と映像メディアを並行し、統合させながら自らの表現活動を行っていくことである。言語の長所は分析的に明瞭に概念化していくことであり、映像メディアの長所は直感的に自らの体験に比較的近い形で全体的に表現するということである。そうした両者の特性をふまえて総合的に表現していく能力がこれからの映像制作能力であろう（芝崎. 1994)。

また、これまで言語による表現を苦手とする学習者は（特に教育段階がすすむにつれ）自己を表現することが不得意な学習者であるというレッテルをはられ、不利益をこうむることが比較的多かったのではないだろうか。映像制作活動を学校教育の中に取り入れることは、そうした言語による自己表現を不得意とする学習者にも、自己を表現する手段と機会を与えることになると共に、教師にとっても児童・生徒の再発見のよい機会となるであろう（芝崎. 1991)。

日本におけるこの分野の実践は未だ開発段階にあるが、例えばイギリスでは、特にここ数年

（1990年現在）教室での生徒・児童によるビデオ等の映像制作の実習は、ごく日常的なものになってきているようである（ Staffod, 1990)。

(3) 映像利用能力ー今後求められる能力

映像利用能力は映像視聴能力や映像制作能力と密接にかかわりあう能力である。映像視聴能力はある映像情報をどのように読むかという能力であるが、映像利用能力はその前提となる映像情報の判断、選択、整理にかかわる能力である。また、映像制作過程には様々な機器の操作やソフトの利用がふくまれるがこれらの能力も映像利用能力に含まれると考えられる。また、既にある映像情報を組み合わせて利用することも映像利用能力である。
そのように考えていくと、これまで映像利用能力はさほど重要視されてこなかったが、新しい学力観の観点からも、非常に重要な能力としてクローズアップする必要があるであろう。

5．新しい映像活用能力ー統合された能力をめざして

以上、映像活用能力について検討してきたが、映像視聴能力の項にその記述の多くがさかれた印象はいなめない。このことは筆者のこれまでの関心のかかりかたの反映ではあるが、それは同時にこれまでの学校教育の中での情報の扱われ方の反映でもある。

つまり、与えられた情報を学習者がどのように読むかが関心事であったし、いくら主体的読みを重視したところで、その結果期待される成果はあくまで情報の消費者のという発想を越えるものではなかった（ただし、今後も学習者が情報の受信側に立たされることが実際の授業場面としては圧倒的に多いと考えられるし、マスメディアとの日常のかかわりにおいても当分の間はそうであるので、その中で新しい学力にかかわる主体的な読みとして「創造型の読み」を映像視聴の中で強調することは重要である)。

しかし今後は与えられた情報のなかから自ら必要な情報を選択、整理し、処理するという一連の流れの中で、映像利用能力と映像視聴能力を統合させた能力が希求されるし、さらに自己表現能力としての情報の創造・表現・伝達能力である映像制作能力と状況に適したメディアや機材の選択能力であり、機器の操作やソフトの利用能力である映像利用能力を統合させた能力が希求される。

また、マルチメディアの特性の１つであるインタラクティブ性と今後のネットワークなどのインフラの整備を考えると、学習者は情報の受信者であると同時に情報の発信者でもあり、情報の利用者でもあることが今後増えてくると思われる。

そこでは映像視聴・映像制作・映像利用の各能力は別々に発揮されるのもではなく、一体化し、統合された能力として扱われるべきであろう。

さらにいえば、コンピュータであるとか映像であるとかというようなメディアによる情報の区別が意味を失いつつあり、言語をも含めた広い意味で、情報をデジタル化されたシンボルによって形成される情報としてとらえ、新しい映像活用能力をベースとした新しい情報活用能力の形成をめざすべきである。

また、ネットワークなどのインフラの整備により、これまで主としてマスメディアに対していわれてきた以上に、批判的視聴能力が重要となるであろう。つまりネットワークが整備され、

誰もが情報の発信者となることができるようになったために、より情報に対する吟味やモラルが求められるようになってきているのである。これは情報の送り手としても受け手としても使い手としても重要な問題である。

以上のようにマルチメディア時代における新しい学力として新しい映像活用能力が求められ、今後はその育成の具体的な手だてについての研究・実践をより一層進めなければならない。

【引用文献】

文部省　1993年　「新しい学力観に立つ教育の創造と展開」　p. 8.

田中博之　1994年　「メディアが開く新しい教育⑤　子どもの思考力・表現力をのばす授業づくり」　教育工学実践研究　No. 113　才能開発教育研究財団　p. 26.

水越敏行　1994年　「メディアが開く新しい教育」　学研　pp. 170-174.

拙著　1989年　「中・高校生の映像視聴能力に関する考察」　視聴覚教育研究第20号日本視聴覚教育学会編　pp. 37-49.

Stafford, Roy(1990). Redefining Creativity : Extended Project Work in GCSE Media Studies, Watching Media Learning,Brighten,Falmer. pp. 82-85.

拙著　1994年　『映像メディアを利用したスピーチ指導』「新しい授業の工夫」大修館　pp. 27-28.

拙著　1991年　「メディア教育のカリキュラム開発の構想」　上智教育学研究　p. 25.